

〈遊び場空間〉の現状分析とこれからの公園デザイン —地域の人々と共生するユニバーサルデザインの提案—

小泉裕子・川口和英・田爪宏二・長谷川岳男・柴村抄織・大石美佳

The Analysis of the current situation of 'spaces for children's playground' and the prospects for designs of the future playground

KOIZUMI Yuko・KAWAGUCHI Kazuhide・TAZUME Hirotsugu
HASEGAWA Takeo・SHIBAMURA Saori・OISHI Mika

<SUMMARY>

The government and local administrations recently recognize the importance of raising children not only by families, but also by local communities, and are therefore beginning to hold up resolutely the need of securing spaces for children's playground in local areas. So, this study sent out questionnaires to parents now raising children and researched how they used playgrounds and what they wanted by using playgrounds. We got information, through this research, about conditions of facilities children's playgrounds which parents and children used, mental uneasiness they felt when they used playgrounds, and expectations they had for future playgrounds. Then, we suggested an original model to develop playgrounds which take root into local communities for the future child care support for families taking account of ideal playgrounds for parents. We also argued about the maintenance of environments as an universal design, designs of playing implements based on the results of the research into the actual situations of playing implements in foreign countries, and needs of arranging play leaders in children's playgrounds.

Keywords :

spaces for children's playground, maintenance of playground, playground as an universal design,

子どもの遊び場空間

公園管理

ユニバーサルデザイン

play leaders,

local communities, child care support for families

プレイリーダー

地域社会

子育て支援

1. 研究の経緯と本年度の目的

近年子どもの〈遊び場空間〉が社会的な問題になり、その環境整備が急務の課題となっている。その背景として2つの仮説を挙げると、一つは「公園や遊び場からこどもがいなくなりつつある

現象」である。すなわち公園、廃材置き場や道路の路地、空き地等、従来子どもの活動の拠点であった空間からその活発な姿が減少している問題が挙げられる。少子化傾向や高度情報化社会がもたらした遊びの変化、また子育て層の家族形態の変容

などがその現象を加速する主な原因として考えられよう。2つめは、「公園や遊び場が子ども達に危険な場所となりつつある現象」である。たとえば、子ども達の大好きな砂場がごみや動物たちの排泄物の散乱により不衛生な状況になっていること、箱ブランコや雲底での死亡事故や使用遊具による大怪我の続発、さらに不審者の増加による公園管理体制への不安が募っていること等がその主要因として挙げられる。時代とともに変化しつつある〈遊び場空間〉のこのような変容は、決して子どもたちに良い影響を与えてはいないと考えられる。

そこで我々は、平成13年度に〈遊び場空間〉プロジェクトを発足し、様々な視点で〈遊び場空間〉を捉え直すことから研究を開始した。我が国における〈遊び場空間〉の研究には、岡田・仙田(1991)¹⁾、長山(1991)²⁾、大村(1994)³⁾、梶木(1997)⁴⁾らの実態調査を基軸とした研究をはじめ、仙田の「遊び環境のデザイン」(1987)⁵⁾および「子どもの多様な活動の場となる都市公園に関する研究会」(2001)⁶⁾など先駆的な公園モデルの提案を例に見るが、〈遊び場空間〉の研究課題は、建築工学的視点、歴史学的視点、保育学的視点、心理学的視点、児童学的視点、児童文化的視点など多領域に渡るべきであり、包括的観点および子どもや利用者の視点に立った〈遊び場空間〉モデルを検討していくことが重要であると思われる。本研究のオリジナリティは、研究員それぞれの専門領域を機軸とした視点を論考に生かすとともに、利用者の今日的ニーズを主体とし、地域資源の活用を重視することをテーマとしたことである。

さて本年度の研究目的は、まず第一に利用者層の〈遊び場空間〉へのニーズを把握するための実態調査を行い、時代の変化に対応したこれからの〈遊び場空間〉についての知見を得ること、第二に利用者層のニーズに対応しつつ、前掲した包括的視点を携えた21世紀社会にふさわしい理想的〈遊び場空間〉デザインの理念を提案していくこととする。

また、本調査の結果は「子どもの遊び場と子育てコミュニケーションに関する調査報告」(2002)²³⁾、

「子どもの遊び場の活用実態と遊び場に対する要望」(児童研究 vol.81, 2002)²⁴⁾において、それぞれ報告をとりまとめたものに準拠するが、本研究ではその中でも保護者による〈遊び場空間〉へのニーズを詳細に分析し、論考を重ねていくこととする。

2. 研究の方法

(1) 調査方法

研究の第一目的である利用者層の〈遊び場空間〉への実態及びニーズを把握するため、首都圏在住の保護者へのアンケート調査を実施した。調査地には、神奈川県内の4地域(鎌倉市、横浜市、川崎市、逗子市)を選出した。この4地域は、神奈川県下においても人口密度の高い地域であり、また首都東京のいわゆるベッドタウンと言われ、地理的環境に差がないと思われる地域である。そしてアンケートの配布は、これらの地域住民の内で小学校又は中学校に通う子どもの保護者を対象とした。今回の対象者は、特に〈遊び場空間〉を公園と設定し調査を行うこととしたため、幼児及び小学校低学年児童の保護者に限定した。

(2) 調査内容

本調査では以下の項目を設け調査を実施した。

1) 保護者及び対象となる子どもの基本的属性(フェイスシート)

保護者(回答者): 性別、住まい、居住期間、年齢、子どもとの続柄。

子ども(対象者): 年齢、性別、きょうだい数、出生順位。

2) 遊び場空間の利用実態: 室内と屋外で遊びの割合、よく利用する遊び場、公園の規模及び誘致距離、利用している公園の規模、公園の利用頻度及び利用時間。

3) 遊び場空間に対するニーズ: 理想的な遊び場や公園についての自由意見。

3. 研究の結果

(1) アンケートの結果概要

アンケートの実施は、2001年11月から2002年1

月にかけて行った。配布数は1090票（幼稚園730票・小学校360票）で、回答数は716票（幼稚園507票・小学校209票）、平均回収率は65.7%であった。

1) 調査対象者の基本的属性

子どもの学年及び保護者の年齢についてのサンプルの構成は表-1、および表-2の通りである。

表-1 アンケート配布状況と回収率

	施設数	回収数	配布数	回収率
幼稚園	4	507	730	69.5%
小学校	3	209	360	58.1%
総計	7	716	1090	65.7%

表-2 アンケート内訳

子どもの学年	1・女	2・男	X	総
幼・年少	71	45	0	116
%	61.2	38.8	0	100
幼・年中	88	105	0	193
%	45.6	54.4	0	100
幼・年長	78	75	0	153
%	51.0	49.0	0	100
小学生	80	95	0	175
%	45.7	54.3	0	100
欠損データ	28	34	17	79
%	35.4	43.1	21.5	100
計	345	534	17	716
%	48.2	49.4	2.4	100

2) 〈遊び場空間〉の利用実態

①室内と屋外で遊びの割合

はじめに子どもの遊びが室内型であるか、屋外型または均等型であるかの現状を分析した。設問には「屋外が主である・屋外が多い・室内が主である・室内が多い・均等である」の5段階を設置した。さらに、屋外型・室内型・均等型の3段階で結果をまとめ、表-3、-4に示した。平日においては、どの年齢の子どもも室内型の遊びが圧倒的に主流であることがわかる。休日では年少児に屋外型の遊びが増加する傾向が認められたが、その他の年齢においては依然室内型が主流であることがわかった。

表-3

平日の実態	屋外型	室内型	均等型
年少	7.8%	85.8%	6.1%
年中	16.3%	70.2%	13.4%

年 長	12.3%	78.0%	9.5%
小学生	23.5%	65.3%	11.2%

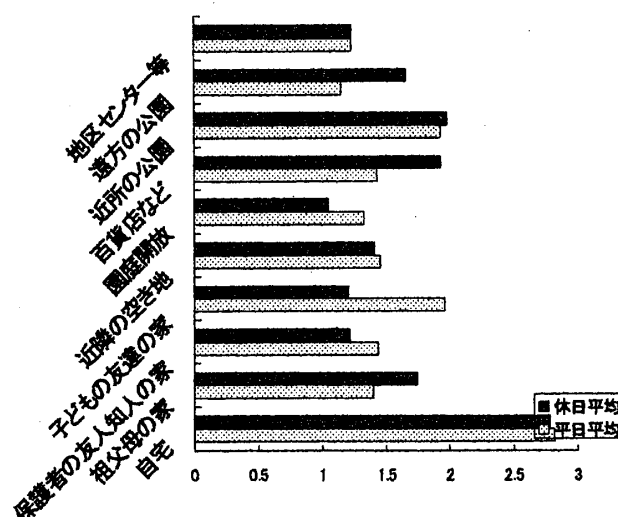
表-4

休日の実態	屋外型	室内型	均等型
年 少	51.0%	44.1%	4.9%
年 中	26.2%	62.4%	11.3%
年 長	27.9%	60.1%	11.9%
小学生	22.0%	67.6%	10.4%

②よく利用する遊び場

ここでは遊び場となっている場所や施設を設問として設置し、その利用頻度を3件法（よく利用する・時々利用する・あまり利用しない）で調査した。利用頻度を得点化し、平日・休日ごとに分散分析を行った結果、平日では「自宅」「子どもの友達の家」「近所の公園」の利用頻度が有意に高かった（F (9.5690)=433.60, $p<.01$ ）。また休日では「自宅」「近所の公園」「百貨店、スーパー」の順に頻度が高かった（F (9.5690)=465.76, $p<.01$ ）。

図-1（よく利用する遊び場）



③公園までの時間距離（アクセス）

〈遊び場空間＝公園〉までの物理的な距離と、その規模について分析を行った。結果を表-5～表-8に示す。平日では徒歩による5分圏内、誘致距離約400m以内の公園を利用しており、利用者同士が近隣に住んでいる傾向がある。一方休日については「徒歩」と同程度に「乗用車」と回答

した者が多く、利用者同士がお互いに顔見知りである可能性は低くなるものと予想された。「徒歩」では「5分以内」に回答が集中していたが、「乗用車」では「1時間以内」まで回答が分散していた。図-1での結果からも明らかになったことではあるが、休日には家族で車等に乗って比較的遠方の広い公園に遊びに行く傾向がうかがえる。これは街区公園レベルの居住地から近距離にある公園への対処が必要なことをしめしているのではないかと推察できる。

表-5 平日利用する公園までの交通手段

平 日	徒 歩	自 転 車	乗 用 車	N.A
年 少	57.8%	11.2%	2.6%	28.4%
年 中	57.0%	14.5%	2.6%	25.9%
年 長	60.8%	11.1%	2.0%	26.1%
小学生	70.3%	9.7%	1.7%	18.3%

表-6 利用する公園までの交通手段

休 日	徒 歩	自 転 車	乗 用 車	N.A
年 少	37.1%	19.8%	25.0%	18.1%
年 中	31.6%	15.0%	35.8%	17.6%
年 長	27.5%	14.4%	35.3%	22.9%
小学生	40.0%	8.6%	31.4%	20.0%

表-7 平日利用する交通手段と時間

平 日	徒 歩	自 転 車	乗 用 車
5分以内	77.4%	68.0%	83.3%
～10分	10.9%	25.3%	16.7%
～20分	3.8%	2.7%	0.0%
20分	0.3%	1.3%	0.0%

表-8 休日利用する交通手段と時間

平 日	徒 歩	自 転 車	乗 用 車
5分以内	77.2%	66.7%	43.8%
～10分	11.4%	22.9%	25.0%
～20分	3.5%	5.2%	31.3%
20分～	0.2%	0.0%	0.0%

④利用している公園の規模

一方、実際に利用している公園の規模の実態について分析する。(表-9 参照)

平日利用している「公園の大きさ」は「100㎡～20m×20m以内(400㎡)」が最も多く、「10m×10m以内(100㎡)」をあわせると、44%が20m×20m(400㎡)以下程度の狭隘な公園で遊んでい

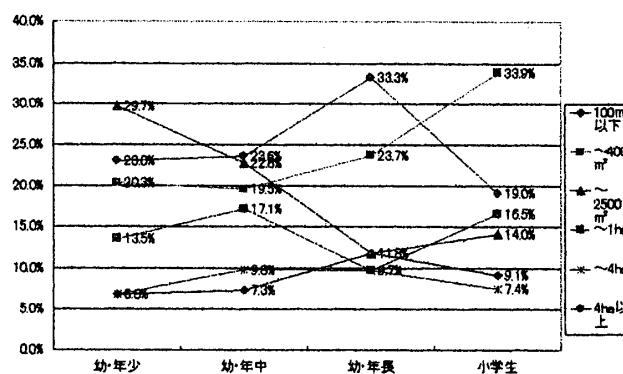
る実態がわかる。つまり平日は狭い公園内で近隣の住民が集まっている傾向となり、よりコミュニケーションが発生しやすい状況となっている。

これに対して休日は「2500㎡～100m×100m以内(1ha)」、「1ha～200m×200m以内(4ha)」、「4ha以上」があわせて42.8%であり、平日と逆に1ha以上の広めの公園を選択して利用している傾向がみられる。「4ha以上」が2番目に多い回答となっていた。子どもの年齢を問わず距離傾向と同じく、休日ほど面積が大きな公園を車などを利用して活用している傾向がみられる。休日は、より広範囲なエリアからの利用が中心となるため、家族単位を中心とした行動が多いと考えられる。

表-9 平日利用する公園の面積

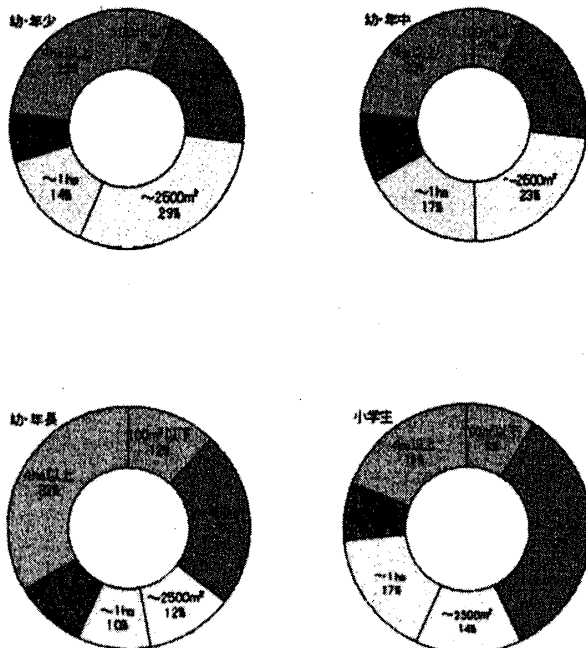
子どもの学年	100㎡以下	～400㎡	～2500㎡	～1ha	～4ha	4ha以上	N.A	総
幼・年少	18	29	19	2	1	3	44	116
%	15.5	25.0	16.4	1.7	0.9	2.6	7.5	100
幼・年中	21	50	23	9	4	5	81	193
%	10.9	25.9	11.9	4.7	2.1	2.6	42.0	100
幼・年長	19	40	16	9	1	3	65	153
%	12.4	26.1	10.5	5.9	0.7	2.0	42.5	100
小学生	36	67	16	3	0	1	23	79
%	20.6	38.3	9.1	1.7	0	0.6	29.7	100
欠損データ	11	31	9	4	0	1	23	79
%	13.9	39.2	11.4	5.1	0	1.3	26.5	716
計	103	217	83	27	6	13	265	716
%	14.7	30.3	11.6	3.8	0.8	1.8	37.0	100

図-2 年代別の利用面積の分布



この図を見た場合、幼稚園年長組から、小学校低学年にかけて利用している公園面積の大きさの分布に大きく変化がみられる傾向がある。

図-3 年代別の利用公園面積



⑤公園の利用頻度および滞在時間

一方、公園利用の利用頻度や滞在時間の実態について分析する。遊び場の中で平日によく利用する公園について「利用回数」は週1回が最も多く利用回数は平均で週1.8回となった。「行かない」と回答した者も1割程あり、公園の利用に関心のない層の存在も確認できた。

図-4 平日の公園利用回数(1週間の利用回数)

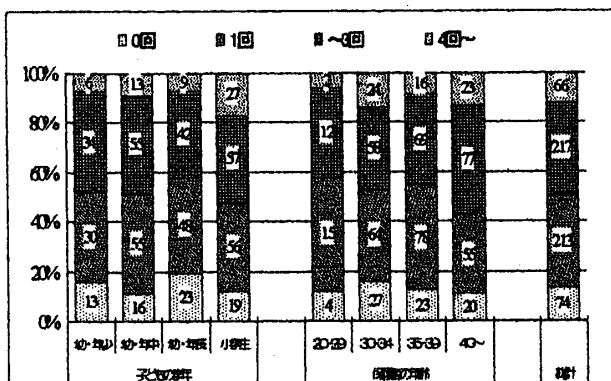
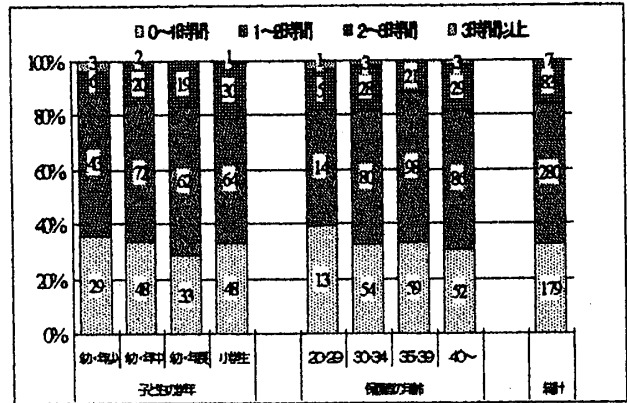


図-5 平日の公園の1回あたりの利用時間数)



「利用時間」は1回あたり「1~2時間(37.8%)」が最も多かった。「公園までの距離」は「徒歩」で「5分以内」が最も多く「公園の大きさ」は「100㎡~400㎡以内」が最も多く、街区公園レベルで徒歩圏内の公園を利用している人が多いことを示す。

一方、休日については「利用回数」は月1回から3回が最も多く、平均は月2.1回という数字であった。子どもの年齢が低い程、平均利用回数は多い。「利用時間」は1回あたり「1~2時間(34.5%)」が最も多いが、平日に比べると「2~3時間(21.7%)」の回答者が増えており、休日の方が利用時間が若干長い傾向がみられる。

図-6 休日の公園利用回数(1週間の利用回数)

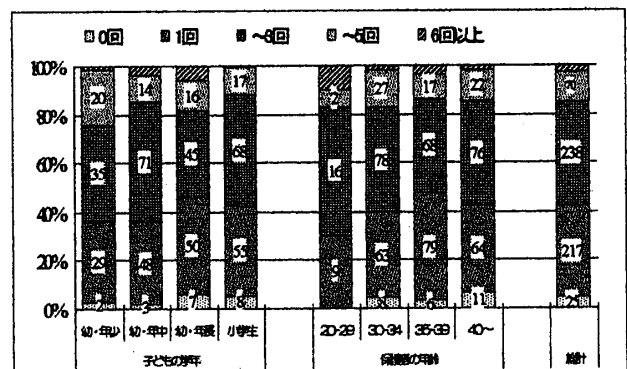
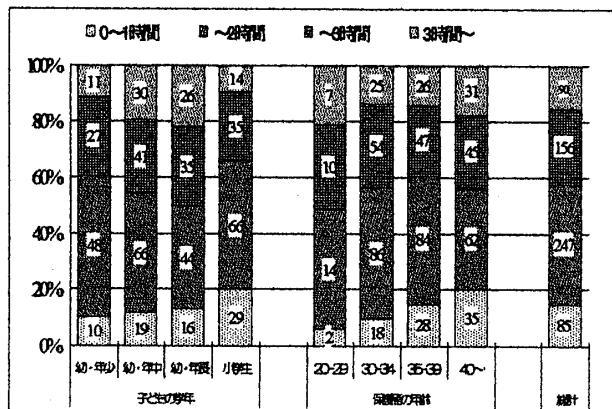


図-7 休日の公園の（1回あたりの利用時間）



＜遊び場空間の利用実態の考察＞

今回の調査結果からは仮説であった「公園や遊び場から子どもがいなくなりつつある現象」が正に現実であることが明らかになった。平日の子どもの遊びが屋外型から室内型へと移行していることや、利用しても1～2時間程度が主流であるという結果からは、いわゆる子どもの遊びが自発的欲求に基づく活動であるという前提さえも揺るがす結果として推察できよう。

また一方で、家族揃って遠方の公園にまで足を延ばす家族的な休日の過ごし方が浮き彫りになってきた。このような平日型と休日型の2極化を示す要因としては、閉塞的な育児環境を抱えつつ、公園デビューという言葉にも示されるような母親たちの子育てをめぐる心理不安の実態や子育てコミュニケーションの問題を掲げることができよう。休日には遠方に出かけ夫と一緒に子育てを共有することで、平日の育児ストレスや不安を軽減しているようにも推察できる。

以上みてきたように、子どもの遊び場をめぐる環境として、多様なニーズに対応した柔軟な公園づくりを図ってゆく必要性が見えてきた。そして、できるだけ子どもたちの自発的な欲求を外に誘い出すような魅力的な遊び場空間を整備して行かないてはならないと思われる。

3) 〈遊び場空間〉に対するニーズ

遊び空間へのニーズ（理想的な〈遊び場空間〉や公園）についての自由記述結果を分析していく。この記述は記入者の任意によるものである。自由

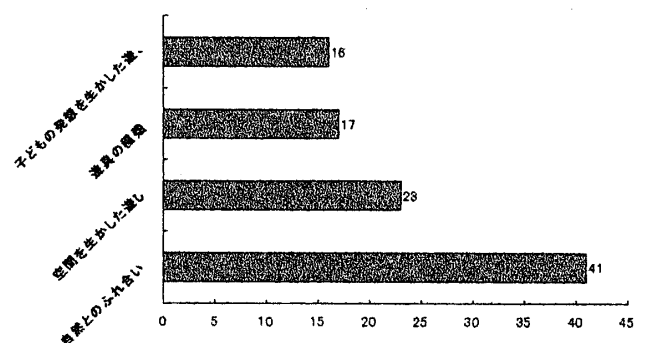
記述内容をKJ法によってカテゴリー分類し、その傾向を分析することとした。研究員6名でそれぞれグルーピング作業を重ね、一致した概念をカテゴリー化していった。抽出されたカテゴリーとその内訳結果を表-10に記す。上位カテゴリーとして①遊びの内容の充実（38.8%）、②公園の環境の充実（40.8%）、③人的要因の充実（12.4%）、④その他（8%）の4分類が得られた。

表-10（理想的な遊び場空間のカテゴリー）

上位	度数	下位カテゴリー	度数	例
遊びの内容の充実 全体の38.8%	97	自然とふれ合い (42.3%)	41	豊富な自然性重視 四季の実感重視 生き物との関わり重視
		空間を生かす遊び (23.7%)	23	心身共に広い空間性の 玩具よりも空間の重視
		玩具の種類 (17.5%)	17	子どもらしい玩具の工夫 アスレチック玩具の設置
		子どもの発想を生かした遊び (16.5%)	16	子ども自身の自発性重視 子どもらしい活発な遊び
公園環境の充実 全体の40.8%	102	安全性 (risk)	37	玩具の安全性重視 玩具以外の安全性
		衛生環境	24	動物の排泄物への対応 ゴミ対応などの美化
		治安管理 (moral)		治安管理の重視
		居住地と近隣設備		居住地との近隣性 設備の充実
人的要因の充実 12.4%	31	幅広い年齢層の利用	22	異年齢集団の遊び ユニバーサルデザイン 特定化しない母親クラブ
		プレイリーダー		プレイリーダーの配置
その他 (8%)	20	その他	5	行政への要望
			15	その他
	250		250	

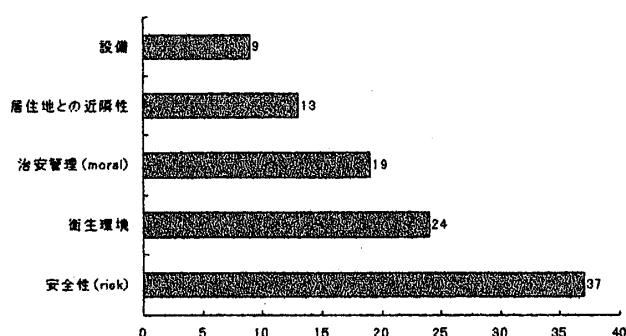
①遊び内容の充実では、自然とのふれ合い、空間を生かした遊び、遊具の種類の充実、子どもの発想を生かした遊びの充実というカテゴリーが抽出できた。この結果からは、保護者たちの「子どもたちに不足しがちな直接体験型遊びの充実」を求めている声が推察される。すなわち、子どもたちが自主的・自発的に思い切り遊ぶことの重要性を認識している傾向が伺えよう。

図-8（遊び内容の充実）



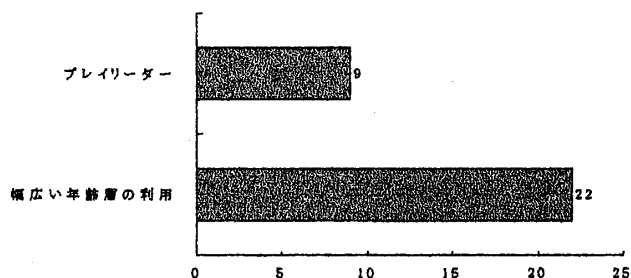
②図-9からもわかるように、仮説2の「公園や遊び場が子ども達に危険な場所となりつつある現象」を裏付ける結果が得られ、公園環境で理想とされることは、遊具の安全性の確保、動物排泄物の処理や公園内の美化を求める衛生管理の充実、公園の治安管理の充実、居住地との近隣性、設備の充実という傾向にあることが分かった。近年になり公園内事故や事件が多発し社会問題になっていることが利用者の心理的不安を増幅させているのではないと思われる。また「設備の充実」では、子どもらしさを尊重したものを重視する傾向があり、アスレチックなどの複合遊具が好まれている。さらに既存の遊具で型どおりの遊びしかできないものより子どもの自発的発想を生かせる遊具を望んでいることも分かった。

図-9 (公園環境の充実)



③「人的要因の充実」から得られた下位カテゴリーの分析からは、異年齢集団で遊ぶことの重要性や誰でも利用できる空間であること、特定化しない母親クラブへの要望というように幅広い年齢層が自由に使うことのできるユニバーサルデザインを望んでいることが推察された。また、プレイリーダーの配置への希望も伺うことができた。プレイリーダーの存在を認識していた人たちの意見からその特徴を記すと、子どもが安全で安心して遊ぶことを保証する“見守る人”であったり、異年齢集団を組織し子どもたちに“新しい遊びを教えてくれる人”であることがわかり、またそのような人材充実への期待も推察できた。

図-10 (人的要因の充実)



＜理想的遊び場空間ニーズの考察＞

上述したように自由記述のカテゴリー分析結果には、〈遊び場空間〉に対するタイムリーな問題が抽出されているように思われる。公園や空き地・路地など、子どもの居場所であった〈遊び場空間〉が、その機能を十分に果たせなくなったのはなぜかという抜本的な問題がそこに反映されたのではないかと推察できる。子どもは遊びを通して社会性や自己の形成を育んでいるものであり、自由に遊ぶことが可能な空間が在って初めてその能力を培うことができるのである。子どもの遊びをもっと活性化させたいという保護者の願い、換言すれば“子どもの健全な遊び観”が、この記述から読みとれたと思われる。

4. 〈遊び場空間〉の整備モデルの提案

以上のようにアンケートの調査から得られた保護者の〈遊び場空間〉の実態及びニーズに関する結果を勘案し、〈遊び場空間〉の整備イメージを検討し、モデルを考案していく。

(1) 整備の理念

子どもは遊ぶための権利を持っている。我が国の現状を考えるならば子どもの遊ぶ環境はその権利を保障するために必ずしも適切な状況にあるとは言えない。子どもが生きる力を最大限育んでいくためには我々は早急に〈遊び場空間〉を整備しなければならない。たとえば、子どもの遊び場には子どもが安全に遊ぶことのできる空間性、子どもがのびのびと遊ぶことのできる空間性、イメージを十分にふくらませることのできる空間性等を確保しなければならない。加えて母親たちの閉塞的な育児環境を支援するような物的・人的・プロ

グラムの環境整備も必要となっている。そのためには、多様な遊具を量的・質的に充実するハード的環境と、遊びのプログラムやプレイリーダーのような人材を充実させるソフト的環境を視野に入れた〈遊び場空間〉づくりが望まれる。

(2) 理想的〈遊び場空間〉モデルの提案

〈遊び場空間〉の基本理念を具現化するため、そのイメージ・モデルを以下のように提案したい。

＜ハード面：物的環境整備＞

- ① 季節を感じることでできる草木など自然を豊富に取り入れる
- ② 様々な年齢が交流できる場と、低年齢児が安心して遊ぶことの可能な場（コーナー）の確保
- ③ 自然性・安全性の高い遊具の配置
- ④ 治安面、衛生面に配慮した環境整備

＜ソフト面：人、内容、体制的整備＞

- ① 異年齢が交流できるような遊び内容プログラムの充実
- ② 遊びのサポーター、プレイリーダーのような人材の配置
- ③ 育児支援を考慮したコミュニケーションプログラムの充実
- ④ 〈遊び場空間〉を運営する地域住民による自主的管理体制の整備

またその整備条件を詳細に具体化したものが下記に記したイメージである。

＜タイプⅠ＞

自然と親しみながら遊び場の中で子どもが伸び伸びと遊ぶ。全体が広い砂場やウッドチップなどの衝撃を吸収できる素材でできた広場（プレイグラウンド）になっている。傾斜した原っぱを利用し草の上を滑り降りたり、ソリ遊びもできる。

また自然の木や廃材などを活用し、安全性にすぐれ、子どもの遊び心をくすぐる空間であることが重要である。

自然と親しむコーナーは、せせらぎでの水遊びや昆虫採取、どろんこ遊びに夢中になることができる場所である。ビオトープも整備する。

そこではプレイリーダーが子どもたちを見守る姿勢—あくまでも子ども自身による自発的遊びを尊重しながら—を取りつつ関わる姿や、新しい遊びを提案している風景がある。

また遊び場の一部には、低年齢児が遊ぶプレイペン型のスペースを設ける。全体がウッドチップや砂などの衝撃を吸収する素材で覆われ、それ自体が砂場の機能を持つ。木製の柵や丸太で囲まれたスペースは、保護者の目が届く広さであり、幼児に圧迫感を与えないが、急に飛び出していないような高さを保つ。その囲いは保護者の椅子になり、またすべり台などの小さな複合遊具も兼ね備える。

低年齢児のスペースの側には、プレイリーダーたちの常駐するコミュニケーションハウスあるいは屋根の付いたあずま屋などが配置され、保護者たちのコミュニケーションの場にもなり得る。

5. 研究の課題

以上、保護者のアンケートを基に理想的な〈遊び場空間〉を検討し、そのモデルを提案した。遊び場に対する保護者のニーズは自然重視型、安全重視型、人材重視型という特徴を持つことが把握できた。今回提案した公園は自然対応郊外型（タイプⅠ）とした。しかし、この理想を実現するためには明らかに広大な空間を必要とするものである。毎日通うことのできる近隣の〈遊び場空間〉、すなわち、限られたスペースの中での〈遊び場空間〉のあり方をも同時に提案する必要があるであろう。これは市街地型公園（タイプⅡ）として別書にて提案する。

6. おわりに

〈遊び場空間〉は、もはや物的環境を整えるだけではその機能を十分に果たすことができない現状にあり、運営するソフト的充実の具体化が急務の課題であると思われる。今後は、〈遊び場空間〉の郊外型および市街地型におけるソフト的充実を図るための研究を深めていきたい。

謝辞： なお、本研究を進めるにあたっては、子ども未来財団からの受託研究をもとに分析を進めた。アンケートを御回答いただいた鎌倉市おおぞら幼稚園、ひがし幼稚園、比企谷幼稚園、川崎市ふたば幼稚園、鎌倉市大船小学校、富士塚小学校、逗子市小坪小学校の保護者の方々、アンケート配布に関してご協力いただいた鎌倉女子大学中村時子氏、ヒアリング関係者、調査関係各位に感謝の意を表したい。

<参考文献>

- 1) 岡田英紀・仙田満：都市化による子どもの遊び環境の変化に関する研究, 計画学会論文集, N O26, 1991
- 2) 長山宗美：冒険遊び場（羽根木）プレイパーク）の行動調査から見た利用実態について, 造園誌, 54(5), 1991
- 3) 大村璋子：子どもの声はずむまち, ぎょうせい, 1994
- 4) 梶木典子：子どもの遊び環境に関する空間計画系研究の動向に関する考察1986～1997, 奈良女子大学人間文化研究科年報第14号, 1999
- 5) 仙田満：遊び環境のデザイン, 鹿島出版会, 東京1987
- 6) 「子どもの多様な活動の場となる都市公園に関する研究会」, 2001
- 7) 国土交通省都市・地域整備局公園緑地課：子どものための公園づくりガイドライン, 財務省印刷局, 2001
- 8) 国土交通省都市・地域整備局公園緑地課：都市公園における遊具の安全確保に関する指針, 2002. 3
- 9) 仙田満・三輪律江・岡田英紀・矢田努：日本における1975年頃から1995年頃の約20年間における子どもの遊び環境の変化の研究, 都市計画211号, 1998
- 10) 梶木典子・渡瀬章子・田中智子：プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価, 日本家政学会誌51, 2000
- 11) アービット・ベンソン（大村虔一・大村璋子訳）：新しい遊び場, 鹿島出版会, 東京1974
- 12) 深谷昌志：自然体験に乏しい子どもたち, 月間レクリエーション, 1994. 4
- 13) 大村璋子：遊び場づくりハンドブック, ぎょうせい, 2000
- 14) 藤本浩之輔：子どもの遊び空間, NHKブックス, 1974
- 15) 無藤隆：子どもの遊びと生活<新・児童心理学講座>, 金子書房, 1992
- 16) ロジャー・ハート：子どもの参画（木下勇・田中治彦・南博監修）, IPA日本支部訳, 萌文社, 2000
- 18) ハンス・ヴァーリン：子どもはどこで遊んだらいいのか（佐藤昌訳）, 日本公園緑地協会, 1987
- 19) 子どもの遊び場と研究会：三世代遊び場図鑑, 風土社, 2000
- 20) 住宅都市整備公団編：ちゃんと小公園のあるまちづくり, 大蔵省印刷局, 1996
- 21) 寺本潔：子どもの眼でまちづくり, KTC中央出版, 1999
- 22) 末田マス：児童公園—少国民文化新書 2, 清水書房, 1942
- 23) 川口和英・小泉裕子・長谷川岳男・柴村抄織・大石美佳・田爪宏二・高城義太郎：幼児の遊び場と子育てコミュニケーションに関する調査研究報告書, こども未来財団委託研究, 2002. 3
- 24) 田爪宏二・大石美佳・川口和英・小泉裕子・長谷川岳男・柴村抄織・高城義太郎：子どもの遊び場の活用実態と遊び場に対する要望—保護者への調査からの検討, 児童研究vol.81, 2002

<要旨>

今日子どもの遊び場をめぐる環境が大きく変化し、子どもの居場所への見直しが急務の課題となっている。代表的存在である公園では子どもの遊び空間が減少・削減されつつあり、このような現状からは、子どもが健やかに育つ環境を保持・存続することは難しいと考えられる。近年国や地方自治体では、家庭だけではなく地域で子どもを育てることの重要性を認識し、いわゆる子育て支援施策においても、地域における子どもの遊び空間の確

保を強く掲げ始めてきた。そこで本研究では、子育てをしている親たちへアンケートを実施し、子どもの遊び場に関する利用状況や利用に当たるニーズの調査を行った。われわれは、調査結果から親子で利用している公園のハード的状況を認知し、さらに利用時の様々な心理的不安の実態、あるいはこれからの公園への期待内容など、調査者の具体的な記述を通して知見を得た。また本研究では、親たちの理想とする子どもの遊び場（公園）を認識しつつ、今後の子育て支援策として地域に根づいた遊び場を開発するためのモデルを独自に提案した。ユニバーサルデザインとしての環境整備、諸外国の実地調査を元にした遊具デザインあるいはプレイリーダーなどの人的配置の必要性などを論考した。

（2002. 10. 30. 受稿）